

# 荊溪湛然の『金剛錍』の問題点

吳 鴻 燕

本論は荊溪湛然(711~782)が撰述した『金剛錍』に説く「假夢寄客」(大正四六・七八一上)の文学的背景と「無情」の用語の問題点について若干の考察を試みようとするものである。

## (一) 論争の相手

従来、本書は特定人物の説を対破したものとされているが(註略)、筆者は対論相手が一人だけではなかったと推察する。文中(七八五上)に、「大乘諸師」と「斯等」の語が複数の意味であるというのが一つの証拠である。さらに「假夢寄客」という隠喩的な表現は何か曖昧な気分を伝える。この文学的背景を探ることによって本書論述の立場が推定できるのではないかと考える。

古来より、中国の文人は夢に託して自らの心情を表す例が少なくない。孔子は常に周公を夢にみ、『左伝』には夢について三十あまりの事例がみられる。莊子の夢は寓意が最も意義ぶかいと言われる。「莊周夢蝶」の話は後世の小説や詩

などに影響を与えた。智顛の『摩訶止観』(大正四六・五五下)でも一念心を説く段で、「莊周夢蝶」を喩えとして使っている。寓言は自分の意見を直接述べず、他人の口をかりたり、外物に託すところに特色がある。この特性を『金剛錍』の表現法に当てはめてみると、第一の問答形式は「賓主問答」に、第二の擬人化は「寄客」に、第三の虚構、作り話は「假夢」に、第四の誇張の特性は「野客」に当たるといえよう。

こうした寓言による表現をみると、湛然は論争の相手を隠そうとしている様子が伺え、対論の相手は特定の一人ではなく、当時の仏性についての見解を一般論としてとりあげたと推測できよう。当時は諸宗派の仏教学が盛んであったため、湛然自身、宗派的な対抗意識が強かったと思われる。湛然は自分の言い分を鮮明にアピールしようとして、寓言の表現形式を選んだのであろう。

(二) 「無情」の用語に見られる天台教学の変遷

「無情仏性」の表現は、智頭の三大部では一度も使われず、「無情」と同義の「非情」「非有情」の語も全くみられない。

天台教学で頻繁に依用する『大智度論』にもこれらの用語は表われない。この点について、『金剛鐔』の中でも論じている（七八三上）。しかし、湛然の三大部の注釈書には、これらの用語が二十五箇所ある。『文句』（大正三四・六〇中）が、衆生・非衆生と表現しているのに、湛然『文句記』（大正三四・二五〇下）では有情・非情に置き換えられている。

智頭の三大部には「俱舍」の言葉は一箇所も見あたらないが、湛然の三大部の注釈書においては、「俱舍云」の用例は「37箇所」にみえる。真諦訳『俱舍論』では「無情」「非情」「非有情」の語は一箇所も見あたらないが、同本異訳の玄奘訳においては、350箇所も見出せるのである。「無情」の語の依用根拠は玄奘訳『俱舍論』に基づくのであろう。その関係を検証してみると、

玄奘訳『俱舍論』に、「諸地獄卒是有情不。有説、非情、如何動作。有情業力」（大正二九・五八下）

の文章がある。獄卒が衆生であるか、非衆生であるかという点について、『文句』（六〇中）の解釈では「變化」によるとしているが、湛然の『文句記』では「有情非情、並是共

業所感」（二五〇下）、すなわち、獄卒が有情と見え、非情と見えるのは共業の所感であると註解する。この解釈は『俱舍論』に近いものといえよう。湛然はこのような解釈から、『金剛鐔』で「一塵一心、即一切生佛之心性。何獨自心之有無耶。以共造故。以共變故。」（七八二下）また、「依報共造。正報別造」（七八三中）と述べる。いずれも有情業と共に依報の国土も造られるというのである。

「無情」の語は、新訳時代に入ってから出てきた言葉であることが知られる。湛然の三大部の注釈書で「俱舍云」の用例が多くみられることから、湛然教学において新訳経論の影響による変化が生じたことが知られるのである。

(三) 湛然の無情義

湛然の無情仏性説は、従来、中国的自然観にもとづく万物一体観によって形成されたのではないかと考えられてきた。しかし、筆者は彼が天台教学を忠実に把握したうえで、無情仏性説を唱えるにいたったのではなからうかと考えるのである。『大智度論』（大正二五・一六八上と五三三下）では、非衆生の語は、ただ山石や樹木などを意味するだけでなく、疾病、飢渴、寒熱、墜落などの、人間の感覚や、病氣や災害までを総括する語として規定している。湛然の『文句記』では、「忍無情惱。名爲法忍、謂寒熱、風雨等。」（二八三上）と記して

おり、この無情の概念は『大智度論』の非衆生の考えに一致している。

玄奘訳『俱舍論』（五七上く中）では、一切の現象は有情衆生の業によって立てられたものであるという。『金剛鐺』（七八三中）では、依報（国土）は共に造るもの、正報は別に造るものであるから色はすなわち心であると説く。また「猶業力造、造遍三界。」（七八三下）と述べ、三界が業力によって造り出されるものであると定義している。

よって、湛然の無情仏性説は、『大智度論』による「非衆生」の教説内容と『俱舍論』における非情は有情の業によって立てられるという説に基づいて構成されているといえよう。それはつまり、湛然の無情仏性説が万物一体観によって成立した思想であると言うよりは、むしろ有情と無情が共存する世界を想定して成立したと考えるべきであろうと思う。

#### （四）まとめ

以上、「假夢寄客」という隠喩的な文学背景を考察した結果から、論争の相手は特定人物を指すのではなく、当時の仏性についての見解を一般論としてとりあげたと推測できよう。また、「無情」は新訳によって出てきた言葉であることと、三大部の注釈で「俱舍云」の用例が多くみられることから、湛然にいたって天台教学に一つの變化が生じたことが知

られるのである。そして湛然の無情仏性説の形成は、『大智度論』による「非衆生」の教説内容と『俱舍論』における非情は有情の業によって立てられたという説に基づいて構成されたものであるといえよう。

1 『第二屆國際唐代學術會議論文集』上冊、羅宗濤「四傑三季之夢」台北文津出版社、1993年。

2 近藤春雄『唐代小説の研究』、笠間叢書刊、昭和33年。

（キーワード） 荆溪湛然、無情仏性、『金剛鐺』

（駒沢大学大学院）